

---

# 僧侶は勇者を恫喝し、魔王を従える

Aura

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僧侶は勇者を恫喝し、魔王を従える

### 【Nコード】

N0694Y

### 【作者名】

Aura

### 【あらすじ】

「お前は神の啓示によって魔王討伐に選ばれた僧侶だ！勇者の俺についてこい！」ウジ虫が粹がるなよ。死にてえのか？……」魔王討伐のために勇者は神様の示した仲間を集めるべく旅をしていた。

そこで出会った僧侶は口が悪く、ガサツで、自分勝手な最強僧侶？「ごめんなさい。なんでも言うことを聞きます。許してください」魔王討伐のための勇者パーティーの旅は続く？

この作品で、パソコンでの読みやすい書き方とかを色々試してみたいと考えています。  
そのため文字の量やスペースの取り方など、色々なアドバイスを頂けると嬉しいです。

なおこの作品の更新は完全不定期で行いたいと考えております。  
よろしく願います。

## プロローグ（前書き）

この作品で、パソコンでの読みやすい書き方とかを色々試してみたいと考えています。

そのため文字の量やスペースの取り方など、色々なアドバイスを頂けると嬉しいです。

なおこの作品の更新は完全不定期で行いたいと考えております。よろしく願います。

## プロローグ

王都スプリジア。その名の通り王が住む城の城下町として栄え、この国の根幹をなす都市である。

そんな大都市に、もっとも多く存在する教会が聖フィオ教会だ。

フィオ教はこの世界で最もポピュラーな宗教で、半分以上の人はこのフィオ教を信仰している。

そんな、数多く存在する聖フィオ教会の一つに少女はいた。

片膝について、赤子を抱く聖母ホーライトの像に祈りをささげている。

「ああ、どうか一日でも早く、この世界から魔物の恐怖が消えますように」

そう祈るのが少女の日課だ。

今日も同じように、聖母ホーライトの像に向かって祈りをささげていた。

「最近では、西の森で魔物が増えていると聞きます。ホーライト様どうか弱き私たちに神の御加護を」

その日の祈りを終え、教会を出ようと立ち上がった時、変化は起きた。

辺り一帯が白く輝き、景色が見えなくなる。

少女は一瞬のうちに真っ白な空間に閉じ込められた。

「な…なにが……」

その光景に驚きあわてる。

しかしどこか安心感のある空間だと少女は感じた。  
まるで母親の腕の中に抱かれるような。

(マリア      マリア      )

突然頭の中に響き渡る声。

それは紛れもなく少女自身の名前を呼んでいた。

(聞こえますかマリア      )

「は…はい。聞こえます」

少女マリアは、無意識のうちにその声に返事をしていた。

(あなたに神からの啓示を与えます)

「あ、あなたは」

(私は、あなた達がホーライトと呼ぶ存在。あなたが毎日、欠かさず祈りをささげたことで、私とあなたの間には絆ができ、それによって神の啓示を告げることができるようになりました。啓示を聞き、どのような行動するかはあなた次第です。あなたの心のままに行動しなさい)

「はい」

マリアは聖母ホーライトの言葉が嘘だとは思えなかった。

そして聖母ホーライトの言葉を      神の啓示を受け入れた。

(間もなくあなたのいる教会に来る少年がいます。名はエース。神

の加護を受け、光の力を宿した、勇者となるべき存在の少年です。あなたは、この啓示をその少年に伝えるのです。そうすれば、あなたの行動はきつと良い世界に導かれるでしょう。

「はいホーライト様」

マリアは一回だけうなずいた。

すると光に満たされていた空間はスツと無くなり、元の教会に戻っていた。

マリアは教会の扉を見る。

今から来る少年に聖母ホーライトから授かった神の啓示を伝えるために。

そしてこの瞬間から、勇者となる少年の運命は、大きく回り出した。

## プロローグ（後書き）

もしよろしければご意見、ご感想お願いします。



## 王は勇者に託し、剣士と旅立つ

「必ずや姫様を魔王の手から救出して見せます！」

「たのんだぞ。もはやそなただけが頼みだ」

「は！」

エースは今、王の前にいた。

偶然立ち寄った教会で、マリアと名乗る少女から神の啓示を受けたエースは、勇者として魔王を倒すことを決めた。

両親を魔王によって殺されたエースは、魔王を倒すべく国王軍の入団試験に来た所で、その話を断る必要は皆無だった。

その後マリアとともに王城へ行き、その事を王に告げた。

国王お抱えの星読みの魔女によってその事は預言されており、エースは何事も無く勇者として迎えられ、マリアもまた神の啓示の巫女として王城へ迎え入れられた。

それが今から二か月前の話だ。

そしてエースは、一昨日まで勇者として修行に励んでいた。

しかし、修行の祠と呼ばれる場所で修業を積んでいたエースに、驚くべき情報が王国兵からもたらされた。

それは王女が魔王の手先によってさらわれたと言う物だ。

その話を聞いたエースは急遽<sup>きんぐ</sup>王都へ戻り、王と謁見した。

そして今に至る。

「星読みの魔女によれば、エリスは魔王城に連れて行かれたそうだが、しばらくの間は、命に別状は無いそうだが、魔物のはびこる魔王城に一人にいると思うと心配でたまらん」

エリスとは女王エリシールのことだ。

王の顔には悲痛な面持ちが浮かんでいる。目元にはくっきりと隈が浮かび、頬も痩せて憔悴しきった様子である。いつも、王の横でやさしい頬笑みを浮かべていた妃の席は空席だ。

妃は王女をさらわれたショックで寝込んでしまっていた。

「必ずや王女を助け出して見せます!」

エースはもう一度、王を励ますように宣言すると、謁見の間を出た。謁見の間を出ると、すぐに横から声が掛けられる。

「あんな見栄きつちゃって大丈夫なの？私魔王とかよく分かんないけど凄く強いんでしょ？」

「強い強くないは関係無いんだ。これは俺たちが必ずやらなきゃいけない使命なんだ」

今エースに声を掛けてきたのは、剣士のシルビアだ。

魔王を討伐するために旅をする勇者のお伴として旅について行くことになっている。

シルビアは女性剣士だが、その腕は本物で、勇者のお伴を決めるための、騎士団の闘技大会で見事優勝を果たしている。それも無傷でだ。

修行を積んだ今のエースならそれぐらいは出来るだろうが、それは光の魔法を加えた戦いでの話で、純粋な剣技だけならシルビアが上回っているだろう。

「でもとりあえず仲間集めは必要よね。星読みの魔女様も仲間を集めるって言ってたんでしょ？」

「ああ。勇者と剣士、それに拳闘士と弓使い。そして僧侶の五人を

集めろって言ってたな。今は勇者の俺と剣士のシルビアがいるから後は三人か」

「魔女様はなんて？」

「東に迎えって言われてる。そこに僧侶がいるらしい」

「僧侶って言えば、魔法使って傷の手当てとかしてくれる人だよ。ね。やっぱ早い時期からいてくれた方がオフェンスとしては助かるしね」

「まあそうゆうことだから、明日の朝出発するぞ。準備しといてくれ」

「了解、了解」

そう言うと、シルビアは廊下を歩いていった。

それを見送ったエースは自分の支度のために王城に貸し与えられた自室に戻る。

明日からの旅が、人生初の経験と言うわけでは無いので、旅仕度はなれたものだ。

そもそも、自分が生まれ育った村から王都に来るまでも三カ月近い旅をしてきた。

その間、魔物に襲われたことや、山賊に絡まれたことも何度があったが、それも無事に凌いで今ここにいるのだ。

旅に関して心配しているのは、シルビアのことだ。

シルビアは王都で生まれ王都で育った、生粋の都会派少女だ。

それが森の中の野宿や、洞窟などの探索を出来るかどうかエースは心配していた。

一応訓練は積んでいるらしいが、訓練と実際は別物だ。

シルビアはどうも、その事を分かってないような感じがした。

もう一度しっかりと注意しておかないと、思いながらエースは自分の準備をしていった。

一方、当のシルビアは城下町に来ていた。

明日からの旅に持っていくものをそろえるのと、ちょっとした用事

のためだ。

「ようシルビアちゃん。今日は寄ってかないのかい？」

「ごめんね、明日から王都を離れることになっちゃって、しばらくはこれないと思うの」

「そうかい、それは残念だね、シルビアちゃんがいるだけで店が華やかになるのに」

「また上手いこと言っちゃって。まあ友達にこの店紹介しとくよ」

「そりゃありがたい。気おつけて行ってくるんだよ」

「任せな」

今のは、行きつけの喫茶店のマスターだ。

「ようシルビー。良い果物が入ったんだが買ってたか？」

「ごめんね、明日から旅にでるから日持ちのもの買ったよ」

「そりゃ残念だ。ならこれは選別だ持ってきたよ」

そう言うと果物やの店主はリンゴを投げ渡してきた。

それを礼を言っ受取り、かじりながら町を歩く。

シルビアが街を歩くだけで、いろいろな人から声を掛けられる。それだけシルビアが街に浸透しているのを意味していた。

掛けられた声に一人一人丁寧に返して行き、目的の店にたどり着いた。

「コリンいる？」

店に入って声を掛けるが、反応は無い。

だが、シルビアは遠慮なく店の奥に入ってしまった。奥の部屋で寝ていることを知っているからだ。

「コリン〜」

案の定、店の奥にあるベッドに目標の人物は寝ていた。

「また店開けっぱなしで寝てる。起きて、お姉ちゃんが来たよ」

ゆさゆさとゆするとコリンは目を覚ました。

そして瞼をこすりながら姉を見つけると「おはよ〜」と符抜けた声で返事をする。

それを見て「もう昼だよ」と言いながら、締められたカーテンを開けた。

光の眩しさにコリンは目を瞬かせた。そして徐々にはっきりと意識を覚醒させてゆく。

「お姉ちゃんおはよ〜。こんな時間にどうしたの？」

姉が騎士団に入っていることを知っているコリンは、普段なら姉がこの時間は訓練の時間なのも知っている。そのため出てきた質問だった。

「明日から少し旅に出ることになったのよ。それで今日はその準備のためのお休み」

「そうなんだ〜、また魔物退治？」

「魔物って言ったら魔物なんだけど、相手は魔王よ。知らない？王女様が魔王に誘拐されたの」

「知ってる。じゃあ噂の勇者様と一緒に行くの？」

「そうよ。選抜大会で優勝したからね」

「凄い！流石お姉ちゃんだ！」

「んふふ。ありがとう」

腰に抱きついてきたコリンの頭をシルビアはやさしく撫でる。シルビアとコリンはもともと孤児院で育った。

大きくなってきて、一人でも稼げるようになった時、二人は孤児院をでて、才能のあったシルビアは騎士団に、コリンは雑貨店を始めた。

大きくなったと言ってもシルビアはまだ十六歳で、コリンに至ってはまだ十二歳だ。

農家としてなら十分な働き手になることはあっても、商売をするうえではまだ幼い。

そこでシルビアは、定期的にコリンの店を見に来ていた。

「それでね、魔王を倒す旅だから、今回の旅はかなり永くなりそうなの。下手すると一年二年帰ってこれないかもしれない。死ぬ気は無いから絶対に戻ってくるけどね」

そこで安心させるように、コリンに小さくウインクする。

「だからその間、この店を一人で切り盛りしなきゃいけない。分かるよね？」

「うん」

「出来る？」

「大丈夫だよ。私もだてに一年もこのお店やってないもん」

コリンは自分の胸をポンと叩く。

「よく言った。流石私の妹だ」

「えへへ」

「じゃあ、私はまだ準備があるから行くね」

「うん。お姉ちゃん気をつけてね」

「まっかせなさい。街とかに寄ったら手紙書くから」

「うん。楽しみに待ってるよ。行ってらっしゃい」  
「行ってきます」

そう言ってシルビアは店を出た。

昔は帰る場所が孤児院だったが、今はコリンの待っているこの店がある。

必ず帰ってくると胸に誓って、シルビアは王城へ戻って行った。

翌朝。

王城の門の前に二人は立っていた。

「じゃあ行くか」

「おっけ」

エースは肩に掛けるタイプの鞆と、腰に片手剣。背中に盾をしょっている。

軽そうに持っているが、剣も盾も三キロ以上あり、一般人が持つて歩けば十分とせずに疲れ果ててしまう代物だ。

このあたり、勇者のたくましが表れている。

一方シルビアも同じような鞆を肩から下げている。

だが、腰に片手剣は無く、背中に大きな両手剣を背負っていた。

これがシルビアの愛用の武器だ。

少女から放たれるとは思えない重い一撃が、これまで多くの魔物や盗賊を撃退してきた。

二人は王都を出て、僧侶がいると言われている東へ向かった。

**勇者は剣士と旅をつづけ、メイドに会う。 1 (前書き)**

まだ僧侶出てきません。次の更新にはやっと出てきます！

区切りが上手くつかなかったなのでこれはちょっと短めになってしまいました。



## 勇者は剣士と旅をつづけ、メイドに会う。 1

勇者の旅は順調そのものだった。

東へ向かう間、いくつもの村により、そこであつた人々から話を聞く。

そして魔物に苦しんでいると聞けば助け、そのお礼にと食料や武器を与えられた。

勇者はその好意を拒否すること無く受け入れた。

しかしシルビアは、勇者への崇拜にも似た期待を寄せている村人に少し戸惑いを感じていた。

そしてシルビアは、勇者エースがそれをどう思っているのか、今夜聞こうと思っていた。

「ねえエース」

「なんだ？」

今日は前日に村を出たばかりで、次の村までは三日ほど掛かる道沿いの原っぱで野宿だ。

今ならエースの真意を聞けると思い、シルビアは思い切ってエースに問いかけた。

「最近、村人があんたに寄せる期待が大きすぎると思っただけど、あんたはどう感じてる？」

寄る村々で人助けしていることもあり、すでにこの辺では勇者が来ていることが明白になっている。どこかの村に立ち寄れば村総出で歓迎されるほどだ。

「別に問題無いだろ。実際俺たちはあの人たちを助けてるし、感謝されるのは当然のことじゃないのか？」

「最初は確かにそんな感じだったけど、最近はそうでも無いじゃん。村に補給に寄っただけでなんかすっごい歓迎されて、食糧とかもただで分けてもらっちゃってるし」

シルビアの懸念はそこに会った。

何かの感謝として食料などを貰う分には特に問題ないと思うのだが、最近では無償で貰ってしまっている。それでは恩を返しているとは言えない。

「考えすぎだろ。俺たちは魔王を討伐するって重大な使命を背負ってるんだ。それぐらいされても罰は当たらないよ」

「うーん、そうなのかな」

そのあたりシルビアは良く分かっていない。

孤児院で育ち、何かを貰うには常に対価が必要だった昔に比べると今は楽すぎる。

その差が、シルビアに違和感を与えていた。

そしてこの勇者の態度にも。

「そうだって。じゃあ俺はそろそろ寝るから、交代の時間になったら起こしてくれ」

そう言ってエースは布団を頭からかぶる。

今日は野営と言うこともあって、魔物に襲われないように交代で警備する必要があった。

「了解」

シルビアは番をしながら最近のエースの態度を考えるのだった。

その後もエースたちは魔物を討伐しながら東を目指す。  
そしてエースはその力で困っている人々を助け続け、次々と魔物を退治していった。

それに比例して、エースへの歓迎の度合いも増していた。

一つ前の村にたどり着いたときなどは、もはや祭のような状態だ。  
シルビアが収穫祭でもやっているのかと聞いた時に、勇者が来るかもしれないから準備していたと聞いた時は心底驚いた。

そしてエースはそれが当然とばかりにその歓迎を受け、飲み食いして村を後にした。

その時のエースの反応をシルビアは啞然として見ていた。

俺は勇者だと名乗り、村の女性を侍らせ、大いに祭を楽しんでいたのだ。

勇者と言えど、エースはまだ思春期真っ盛りの男子だ。

女性に鼻の下を伸ばすのはしょうがないと思っていたが、流石に酷過ぎる。

そう考えたシルビアは、一度エースに少しは自嘲するように注意をしたが、全く聞く耳を持つてくれなかった。

その事もシルビアを不安にさせた原因の一つだ。

エースは実力がありすぎる。しかし、精神はそれに対応した形では育っていない。

そして間違いを起こした時、それを止めれる人物がいない。  
何とかしなければ……

コリーの姉として育ったシルビアの姉心が燃え上がっていた。

## 勇者は剣士と旅をつづけ、メイドに会う。 2

そしてさらに二週間ほど旅を続け、一つの村にたどり着いた。すでに王都をでてから一カ月が過ぎようとしている。

収穫が名声しかない旅に、二人はそろそろ疑問を持ち始めていた。そんな時にたどり着いたのがこの村だ。

だが、この村は他の村とは大きく違っていた。

「廃村なのか？」

エースの疑問ももつともだ。

閑散としていた。

今までの歓迎が夢だったかと思えるぐらいに人がいない。

だが、家自体は綺麗に整備されているので無人と言うわけではないだろう。

「とりあえず村人を探そう」

「そうね」

二人はまず村の中心まで行くことにした。

小さい村なのだろう。中心にはすぐについた。

そこで一人の老婆を発見する。村の中心は広場になっており、そこに井戸が設置されている。おそらく、そこに水を汲みに来たのだろう。

だが、腰の曲がった老婆が井戸から水を組めるとは思えない。

二人は駆け寄り、手伝おうとしたが、そこで見た光景に二人の足は止まった。

老婆がやすやすと井戸から水をくみ上げているのだ。それも、二人でも苦勞しそうなほど大きな水桶でだ。

「なあ……どうなってるんだ、あれ？」

「私に聞かないでよ」

「とりあえず行ってみるか」

二人が近づくと、老婆も二人に気づいたのかお辞儀をする。それに返すようにお辞儀をして、老婆の元までたどり着いた。

「おや、こんな辺境の村に冒険者さんですか？」

老婆は穏やかにほほ笑みながら二人を迎える。

その様子からこの村には勇者の情報が来ていないのが推測できた。

「いや、俺らは魔王を倒すために旅をしているんだ」

「おやまあ、それはお疲れ様だね」

魔王と聞いて、特に驚かない老婆に逆に二人が驚かされた。今までの村人はみな、魔王と言う言葉を聞いただけで怯える。

それは当然のことだろう。

小さな村ではちょっとした魔物が出てても対処できず、酷い被害が出るものだ。

それが魔王となれば、どれだけの被害になるか分かったものではない。

と言うより、確実に村ごと滅ぼされる。

それを知っているからこそその怯えだが、老婆にはその様子は見られない。

この村にはよほど強い人が常駐でもしてるのだろうか。  
シルビアはその事が気になり、少し聞いてみることにした。

「この村はとっても平和に見えますけど、魔物の被害とかは無いんですか？」

「魔物の被害なんてとんとないね。これもあの人が来てくれたおかげじゃ」

やはり誰か強者が常駐しているようだ。

だが、なぜこの村なのだろうか。特にここにいる理由は無いと思うが……出身がここなのだろうか？

「その人が魔物の退治を？」

「うんや、あの人が来てから魔物自体がこの村を襲わなくなった。

まったく何をやったか知らんが、ありがたいかぎりじゃ」

「討伐されたとかじゃないのか？」

「あの人はめったに村から出んよ。今日もその教会におるはずじゃ。気になるなら行ってみるとええ」

老婆がさしたのは村のはずれにある小さなフィオ教の教会だ。  
そこにその人物はいるのだろうか。

「あの人のおかげでこの井戸もえらく使いやすくしてもらて、ほんま感謝しとる」

「そう言えばこの井戸、やけに軽く持ち上げてましたね？」

「なんでも、魔術つこうて簡単に持ち上げられるようにしてくれたらしいて」

「そうだったんですか」

二人はその後老妻のとどまるところを知らず、あの人の凄いこと

を語り続けてくれた。

曰く、あの人は定期的に動物を狩ってきてくれる。

曰く、魔術で火災を消してくれた。

曰く、魔術で病気を治してくれて、しかも治療費をとらない。などなどだ。

どれも魔法使いなら簡単に出来そうなことだが、井戸の魔術が非常に長い間効いていることと言い、かなりレベルの高い魔法使いなのだろう。

やっと老婆の話から解放された二人は、老婆の言っていた教会にやってきた。

「ここにその魔術師がいるのか」

「そうみたいね。話しを聞く限りじゃかなりいい人じゃない」

「そうだな。魔王の討伐なら快くついてきてくれるだろ。なんてっ たって勇者と一緒に旅ができるんだからな。それだけでかなりのステータスになるはずだ」

「どうかな、聞く限りだとあんまりそうゆうの興味無さそうだけど」

聞いた話は全て、無償でやっていることのようなようだ。その代り、村人から少しばかり食料を貰ったりするらしいが、過剰な報酬は一切受け取らないとのことだ。

「関係無いって。英雄の名声をそこらへんの宝と一緒にするなよ」

エースは笑うが、シルビアはその言葉にどんよりする。

シルビアの注意が全く聞いていない。

「とりあえずここにいっても始まらないし、中に入ってみようぜ」

「それもそうね」

二人は教会の扉を開き、中に入った。



勇者は剣士と旅をつづけ、メイドに会う。 3 (前書き)

物語の主要人物の一人メイド登場です。

### 勇者は剣士と旅をつづけ、メイドに会う。 3

教会の中は王都にあるものとさほど変わらない無いそうだな。

小さい分、席数は少ないが、正面に聖母ホーライトの像が飾られ、その前に聖職者が立つ台が設置されている。

横には小さなオルガンがあり、奥には扉がある。その奥がおそらく聖職者用の居住区になっているのだろう。

「誰がいるか？」

エースの声が教会に反響する。

「すみませーん」

シルビアも声を上げるが、それも反響するばかりで人が出てくる気配は無い。

「どうするかな」

「奥にいるかもしれないし、私ちよつと見てくる」

「わかった。俺はここで待ってるわ。誰か来るかもしれないし」  
「了解」

シルビアは、奥にある扉の前に来た。

ノックをする。

特に反応は無い。

もう一度。

それにも反応は無い。

「しつれいしま〜す」

扉も前で突っ立っていてもしょうがないので、恐る恐る扉を開いた。中は小さな応接室になっていようた。真ん中に簡単なソファとテーブルが置かれている。さらにその奥にも扉が会った。

静かすぎる教会に少し恐怖しながらも足を進める。

そして声が聞こえた。

声は奥の扉から聞こえる。

だが、その声はしゃべり声ではない。

(ん…あつ!…ん!んん!…あつ!)

女性の声だ。そしてその息遣いは荒い。

いや、荒いと言っても疲れて乱れているわけではない。

(ん…んんん!)

シルビアはその声を聞いた瞬間、扉の奥で何が行われているのか想像してしまった。

そして顔を真っ赤にする。

そして静かにまわれ右をした。

これ以上先に進む訳にはいかない。今行けば、確実に取り返しのつかない状態になる。

そう思つて、シルビアはこっそりと部屋を後にしようとした。

しかしその時、入ってきた扉から来てはいけない人物が現れた。

「シルビア誰かいたムグツ！」

その顔が現れた瞬間、シルビアはすでに動いていた。

エースがしゃべりきる前に口を押さえ、全力で部屋から押し出す。その際足音がひどく出てしまったが、気にしてる場合では無かった。

「なにすんだよ！」

外に出て、エースを開放すると、案の定文句を言ってきた。

「あの奥に人がいたのは間違いないわ」

「なら何で逃げたんだよ！さっさと行けばよかっただろ！」

「それができたら苦労しないわよ」

声を聞かなかったエースには理解できないことだろうと思いつながら、シルビアは教会を見る。

もう一度行くべきか、出直すべきか……

だがその考えは杞憂に終わる。

「どうかなさいましたか？」

教会から一人の女性が出てきた。

その姿に二人は目を奪われる。

黒髪は肩甲骨辺りまでふんわりとウェーブを描きながら伸びている。瞳は赤く、その視線は真つすぐに二人を捉えていた。

そして最も特徴的なのが、教会から出てくるには異質すぎるその服装。

「メイド？」

青を基調にしたエプロンドレスは紛れも無くメイド服と呼ばれる、その業界の人物しか切ることのないだろう服装だった。

「はい、メイドのサータニアンと申します、呼びにくいですのでサーニヤとお呼びください。ところであなた達は見たところこの村の人達では無いようですが？」

サータニアンは丁寧に名乗り、二人に疑問を投げる。

「俺は勇者のエースだ」

「私はシルビア。剣士をやってるわ」

「勇者様と剣士様でしたか。それでこちらにどのような用件で？この村には特に何もありませんが」

サータニアンは二人の近くまで来ると、さらに疑問を投げる。

シルビアはその表情から自分たちが教会の中に入っていたことを知られていないと思い安堵した。

「私たちは預言者さまに言われて旅の仲間になる僧侶を探しているの。その僧侶は王都から真っ直ぐ東に向かうと会えるとお告げにあったのよ」

「そうゆうことでしたか。それならばその僧侶とは私の主のことかもしれません」

予想外の言葉に二人が驚く。

思わぬところから僧侶の情報が入ってきた。

「サーニヤさんの主が僧侶なの？」

「回復系の魔法を使い、教会の聖職者を務めておりますので、一様はそのように部類されるかと」

「なら一度会ってみたい！」

「分かりました。では中に入ってお待ちください」

サーニヤは二人を教会の中に促す。  
それにしたがって、先ほど飛び出してきたばかりの教会の中に入  
て行った。

応接室に通され、お茶を出してもらい、そこでしばらく待つように  
言われた。

二人は大人しく、そこで待つことにした。  
サーニヤがお茶をエースの前に置き、シルビアの前にも同じように  
置いた。そしてサーニヤは何故かシルビアの耳もとの口を寄せてく  
る。明らかに内緒話の時のスタイルだ。

「どうかした？」

シルビアはそれに対応して、小声でサーニヤに話しかける

「勝手に部屋に入るのはあまり感心しませんよ？私も主も特に気に  
してはいませんでしたから無視しましたが、あのまま居続けたら私  
も対処を考えていましたので」

その言葉を聞いたとたん、シルビアは顔からサーッと血の気が引く  
のが分かった。

バレている。しかも完璧に。

そしてその言葉から察するに、サーニヤは別の場所からシルビアを  
見ていたのではなく、あのあえぎ声のする部屋にいて、自分のこと  
に気づいてた。しかもその主もセットで……

「うわ……うわ……うめんなやー！」

「うわ！なんだ！？」

突然大声を出したシルビアにエースは驚き、持っていたお茶を落としそうになる。

「ふふつ。さっき言った通り気にしていませんよ。では主を呼んでまいりますので少々お待ちください」

サーニャは二人に一礼すると、部屋を出て行った。

「何だったんだ？」

エースは出されたお茶を飲みながら、シルビアに大声のことを聞く。

「な…何でもないわ！気にしないで！」

「明らかになんかあるだろ、それ」

「なんでもないっいたらなんでもないの！」

シルビアは大きく顔を振りながら、ひたすら黙秘を主張した。

勇者は剣士と旅をつづけ、メイドに会う。 3 (後書き)

もしよろしければご意見、ご感想お願いします。



二人は僧侶と出会い、勇者は現実を知る。 1（前書き）

やっと題名の僧侶登場です。

これで題名詐欺ともおさらばだ！

## 二人は僧侶と出会い、勇者は現実を知る。 1

僧侶の男が入ってきたのは、サーニヤが呼びに行っただけでしばらくしてからだ。

入ってきた僧侶の姿を見て、二人は呆然とする。

短い金髪の髪に眉を細くそりあげられている。目つきは鋭く、二人をにらみつけていた。見た目は二十代前半と言ったところか。カソツクが恐ろしく似合わない。

呼びに行ったサーニヤは、僧侶の後ろに控えている。

「なんだてめえら」

「俺は勇者のエースだ！」

「私は剣士をやっていますシルビアと申します」

エースは僧侶の威圧に負けじと声を張り上げる。

対してシルビアは丁寧な言葉遣いで挨拶をした。

その対応が二人の明暗を分ける。

「こっちのガキは礼儀も弁<sup>わか</sup>まえてねえのか。おい剣士、勇者の教育つてのはどうなってんだ？放任主義もほどがあるぞ」

「何を！俺は勇者だぞ。そっちこそ俺に対して失礼じゃないのか！？」

「すみません。何度も言っただけなんですけど、なまじ力があるせいか、自分が偉いのが当然と思ってしまったようです」

「マジかよ。こんなのが力持つか神つてのは何考えてんのかね」

僧侶とシルビアはエースを無視して会話をつづける。

無視されたエースは余計に声を荒げていた。

「おい僧侶！俺は神に選ばれたんだぞ！お前聖職者なら啓示に従え！」

「さっきから猿がうるせえんだよ。キーキー騒ぐな。ぶち殺すぞ」

僧侶の威圧は明らかに勇者の纏うオーラを委縮させていた。

シルビアはそのエースの様子に驚く。

そしてこの僧侶なら今の自嘲しきったエースを抑えてくれるのではないかと思えた。

なおも騒ぎ続ける勇者を無視して、二人の正面のソファーに座り、僧侶はシルビアに顔を戻す。サーニャは僧侶の後ろにそっと移動する。

「で、なんのようなんだ」

「はい、実は折り入って頼みがあります」

そこでシルビアは一旦言葉を切る。

孤児院出身のため、敬語は所々怪しい部分はあるが、それでも騎士団に努めている身だ。目上の人との会話の仕方はあらかた頭に入っている。

目上の人と会話をする場合、一気にまくしたてるように話すのではなく、一言一言に間を置き、相手の反応を待ってから話すのが常識だ。

「言ってみろ」

僧侶の反応から、この人物がかなり身分の高いくらいにいた人物だと言ったことが分かった。

シルビアは言われたと通り、言葉を続けた。

「私達と共に魔王を倒すべく協力してもらいたいです」

「魔王を倒す？」

僧侶は眉をしかめる。シルビアは最初、魔王が復活しているのを知らないのではとも思ったが、それは無いと判断する。

ある程度の身分の物なら、出家していても情報は入ってくるはずだ。まして、今の受け答えがすんなり出来る程度の身分の人間は貴族以上ぐらいしかない。

なら魔王の情報ももちろんもっているはずだ。勇者と言う言葉にそれほど驚かなかったところからもそれは分かる。

「はい。私たちは現在、聖母ホーライト様の啓示により、勇者、剣士、拳闘師、弓使い、僧侶の仲間となる人達を探しています」

「それで？」

「聖母ホーライト様はその仲間たちを集め、魔王を倒すようにおっしゃいました。私たちはその啓示に倣い、今仲間を集めている最中なのです」

「なるほどな」

僧侶はシルビアの言葉に一樣は納得する。

そこにシルビアは現状を付けくわえた。

「また、現在王女さまが魔物によって王城からさらわれ、魔王城に軟禁されております」

「王女が？」

「はい、どうやら魔王の命令で魔物が動いたと考えられています。城にいる預言者の預言によって、一年は命の保証はされていますが、出来るだけ急ぐべきと考えております」

女王がさらわれたと聞いて、僧侶の態度が一変した。

何やら考え込んでいる様子だ。

そしてしばらく沈黙が続く。

流石のエースもこの重い空気に騒ぐのを止めていた。

先に口を開いたのは今まで後ろに控えていたサーニャだった。

「本当に魔王が命令したのでしょうか？」

「魔物に命令出来るのは魔物を統べる王、すなわち魔王しかいないと我々は考えています。そうでなければ、今まで人間に会えば即殺そうとしてきた魔物たちが、王女様をさらうなどとはしないでしょうから」

「なるほど、確かにそうですね」

そしてサーニャまでも何かを考えるように黙ってしまふ。

それと変わるように今度は僧侶が話しかけてきた。

「なんでいちいち仲間なんか集める。勇者がいれば軍を連れて魔王城に乗り込むことくらい出来るだろ。王女奪還ともなれば兵士の士気も相当上がるはずだ」

「それが神の啓示だからです。勇者と共に旅をする仲間を五人。先ほど言ったメンバーを集めて魔王城に乗り込めと」

「なるほど。つまりそのゴキブリが弱いから王国軍じゃ逆に潰されるって訳か」

そう言っつて僧侶は鼻で笑う。

「だから仲間を集めながら旅をして経験値を稼げと。神も面倒くさいこと選んだもんだな。俺なら強引にでも突撃させるね」

僧侶の神をも恐れない態度にシルビアは驚く。

サーニャは僧侶の後ろでクスクスと笑っていた。

そして先ほどから間接的に馬鹿にされつつつけていた勇者がついにキ

した。

僧侶との間にあるテーブルを蹴りあげ、勢いよく立ちあがる。そして腰に付けている剣を抜き放ち、僧侶の眼前に向けた。

「さつきから黙って聞いていれば神様を馬鹿にして、俺を馬鹿にして、いい加減にしるよ！僧侶程度が、そんなこと言っていていいと思っているのか！」

「いい加減にするのはてめえのほうだ。ひとん家のテーブルぶっ壊しやがって。これだからクズだつて言つてんだ！」

僧侶は剣を突き付けられても変わらず、勇者を罵倒し続ける。

それを聞いて、勇者の眉間には今にもはち切れそうなほど青筋が浮いていた。

怒るところはそこなのかと突っ込みたいのをグッとこらえ、シルビアはその光景を急いで止めようとする。

しかし、それはいつの間かシルビア後ろに移動していたサーニヤによって腕を掴まれ止められた。

驚いたことに、日頃戦士として鍛えていたシルビアだが、その手はふりほどけないほど強く握られている。

「サーニヤさん、止めないでください。あなたの主人が危ないんですよ！？」

「キール様なら問題ありません。見ていてください」

サーニヤは落ち着いた声で言うと、小さく微笑んでシルビアの腕を離した。

勇者は今にもソファアに座ったままの僧侶に切りかかりそうな体制だ。

「非常に不愉快だが、お前は神の啓示によって選ばれた僧侶なんだ。勇者の俺についてこい！」

剣を構えながら言うそれは、明らかに脅迫だ。

「ウジ虫が粹がるなよ！雑魚がいくら吠えても所詮雑魚なんだよ！連れて行きたきゃ力見せてみる！」

シルビアは二人の緊迫した喧嘩を見ながら、エースの一人称が徐々に酷くなってるな〜と思っていた。もはや現実逃避ぎみである。孤児院で辛い過去を経験してきたはずだが、それでもこれからの旅が思いやられる現状に、これまでにない危機を感じていた。

「良いだろう！俺が勇者の力を見せてやる！」

「水虫が！身の程を教えてやる！」

こうして勇者対僧侶という世にも奇妙な決闘は決まった。

二人は僧侶と出会い、勇者は現実を知る。 2（前書き）

上位の魔物＝悪魔です。



## 二人は僧侶と出会い、勇者は現実を知る。 2

教会から出た一行は森の中に入った。

前から僧侶、シルビアとサーニヤ、最後がエースの順番だ。

シルビアはエースに最後尾をまかせたのを見て、ある程度実力を認めているのかとも思ったが、村人が近くに全く魔物が出ないと言っていたのを思い出して、関係ないと思いなおした。

「そう言えばまだ僧侶さまのお名前を聞いていませんでしたが、窺ってもよろしいですか？」

「ああ、そういやあそうだったな。俺はキールだ。好きに呼べ」

「ではキールさんと。それでキールさん、今私たちはどこに向かっているのでしょうか？」

「この先に小さな伐採所がある。そこで勝負する。村の中で暴れられちゃ周りに迷惑がかかるからな」

「そうゆうことでしたか」

言っているうちに森が開けた。

円形に百メートル四方が綺麗に伐採され、広場ができています。端に小さな小屋があるが、そこが物置だろう。

「ここだ。ここなら迷惑にはならん。馬鹿がどれだけ暴れても問題ない」

エースがまた嘔みつくかと思ったが、エースはじつとキールをにらみ、殺意のこもった視線を投げ続けている。

「じゃあさっさと始めるか。塵芥がどこまで出来るか見てやる」

「あまり調子に乗るなよ僧侶。俺は今マジでキレてる。手加減は出

来ないぞ」  
「ふん」

また鼻で笑った。

そしてシルビアとサーニヤがある程度離れたのを見て、キールは手をクイクイツと動かし、来いと合図する。

それを見たエースは一気に飛び出し、剣を抜くと、キールめがけて振り下ろした。

一般人が対応できる速度では無い。

シルビアなら、今までの経験から避けることもかのうかもしれないが、初見であれば間違いなく切られていただろう速さだ。

キールはその場から一步も動けなかった。シルビアは最初そう思った。そして一撃で勝負がついてしまうのかと落胆もした。だが、結果は違っていた。

エースの振り下ろした剣は、僧侶の眼前で止まっている。驚いたのは勇者の方だ。

間違いなく相手を殺すための全力の一撃だった。それをいとも簡単に抑えられてしまった。しかも僧侶の得意とする魔術を一切使わずにだ。

僧侶はエースが剣を振り下ろす瞬間、右手だけで勇者の持っている剣を止めた。

しかもそれは、真剣白刃取りと呼ばれる技でだ。

シルビアもエースも噂には聞いたことがある技だ。振り下ろされた剣の両側を両手で挟むことで受け止める。そう二人は聞いていたし、出来るとしてもそれが限界だと思っていた。だが、今目の前で起こっていることはその限界を超えていた。

キールは親指と人差し指だけでエースの剣を受け止めていた。

タイミングがコンマ一でもずれば確実に手を切断される危険すぎる技だ。

だがそれを成し遂げ、今エースの目の前に立っている。シルビアはなぜキールがこんなことをできるのか、サーニヤに尋ねようとした。

だが、サーニヤの笑顔に聞くのを止めた。それが当然と言う顔をしていたからだ。聞いても、おそらく期待している様な答えは返ってこないだろう。

「なんだこの緩い振り抜きは。そんなんで魔王を倒そうとしてたのか。ハッ、今のお前ならガキの頃の俺でも十分だな」

「この野郎！」

エースは強引に剣を引くと、再び構え直す。しかし、今度は両手では無く片手だ。

そして開いた左手を胸の前に持つてくると、詠唱を始めた。その詠を聞いて、シルビアが驚く。

「祖は偉大なる世界の母。

全てに光を与える大いなる存在。

その光を持つて闇を払え！

ライトニング・エクスプロード  
閃光の蹂躞！」

それは間違いなく、エースが現在使える魔術で一番威力の高いものだ。

その一撃は、練習用に使っていた藁人形を跡形も無く消滅させ、さらにその後ろにあった城の城壁を撃ち抜くほどの威力を持っている。

そこらへんの貴族の城ならいざしらず、王城の城壁を撃ち抜けるだけの威力を出せる魔術をシルビアはライトニング・エクスプロード閃光の蹂躞しか知らない。

そしてそれは決して人に向けて撃つような代物ではない！

「エース！何考えてるの！それは人に向けて撃つようなものじゃないでしょ！」

「うるさい！こいつは俺の実力を見せろと言ったんだ！だから全力でいく！」

「良い心がけだカス。だが詠唱が長い！発動まで時間がかかり過ぎだ！

闇をもって世界を嗤え。ダイク・キューブ 暗闇の牢獄」

光の矢を放とうとするエースの足元から、急に闇が湧きあがった。それはあつというまにエースを飲み込み正方形の闇を創りだす。

「闇は光を通さない。その中でお前の魔術は無意味だ、クズ」

光は闇を照らすものだと思われている。しかし、深すぎる闇は光さえも弾く。

「馬鹿な！僧侶は回復系の魔法しかまともに使えないはずだぞ」

基本僧侶は神に使えることで、その力を少しだけ借り、祝福という形で小さな奇跡を起こすのがやっとと言われている。

フィロ教の枢機卿クラスでやっと重病人を直せる力を出せるかどうかという物だ。

もちろん、彼らはそれ以外の魔術を全く使えないのが常識とされている。

「ならそいつらが愚図でノロマなだけだ。現に俺は使える」

キールが堂々と言い放った。

シルビアは今度ばかりはちゃんと理由を聞こうと、サーニヤを見る。

するとサーニヤもこちらを見ていて、クスッと笑った。

「あんなこと言ってますけど、キール様は特別です。普通はできません」

「じゃあなんで……？」

「キール様は悪魔と契約しておられますから」

「契約!？」

思いもよらない言葉に、シルビアの声が裏返った。

契約とは、人が召喚魔術などを駆使して魔界に存在する上位の魔物あくまと契約を結ぶことだ。そうすることによってその悪魔の使える力を使うことができるようになる。

しかし、この場合契約の対価として相当なものを要求されるとのこととで、ほとんどの人間は悪魔を呼びだしただけで死んでしまうらしい。

そしてそのような危険な行為は、普通許されるものではない。

「そんなことしていいの？教会ってそうゆづの嚴重に禁止してたはずじゃ……」

「ですから、この辺境の村でこっそりと生活しているんです」

「そうゆづことだったの。じゃあ神様の啓示は、この力を使えってことだったのね」

「そうゆづことだと思えます」

二人で納得し、試合を見ていると、試合は大詰めに入っていた。

一方的にキールがエースをいたぶっているだけだが。

「どうした！これで終わりか！？早くそこからでないと炙り死ぬぞ！」

暗闇の牢獄ダイク・キューブの周りは炎に囲まれ、エースをじりじりと炙っている。と、ようやく勇者が魔術の中から出てきた。その体はボロボロになっている。おそらく、火で囲む前にキールがやたらと撃ちまくっていた氷弾の嵐に巻き込まれたからだろう。

「やっと出てきたか」

キールは出てきたエースの元までつかつかと歩み寄る。エースはすでに満身創痍で、剣を杖代わりに何とか立っている状態だ。

「クツ……」

「生意気な目だな」

エースの前まで来ると、キールは躊躇い無くエースが杖代わりにしていた剣を蹴り飛ばす。

バランスを崩したエースが地面に倒れた。

エースは悔しそうに地面に生えた草を握りしめながら小さくつぶやいた。

「俺の負けだ……」

「ああ！？ 負けたからなんだよ」

だが、その言葉はキールに意味をなさなかった。

キールはエースを踏みつけたまま、その場を動こうとしない。

「俺の負けだ、もうあんたを連れて行こうとはしない」

「だからなんだって。そんなもん当たり前だ。こっちは自分の体掛けてんのに、そっちは何も掛けなしで勝負してもらえたと思ってるのか？」

「なに？」

顔をあげたエースをキールは蹴った。

「こつちが体掛けてんだ。そつちも体掛けて当然だよな」

「クツ…そうだな」

「よし。なら今日からお前俺の奴隷な」

「「な！」」

偶然にもシルビアとエースの声が重なった。

一部始終を見ているサーニヤは何故か顔を赤くし、恍惚とした表情をしている。

シルビアはそれを見なかったことにして、キールに話しかけた。

「待つてくださいキールさん！」

「なんだ？」

「確かにエースは負けましたが、しかし魔王を倒すと言う使命を神から授かっています。奴隷にされてはそれができません！」

「問題無い。俺が魔王城まで行く」

思わぬ返答にシルビアは固まった。同じく勇者もその場に踏まれながら呆然としている。

「気になることができた。だから魔王城へ行く」

「では私達と共に来てくれると言うことでしょうか？」

「こいつは俺の奴隷だ。こいつは俺についてくる。俺はシルビア、お前について行ってやる。もちろんサーニヤも一緒だ。パーティーのリーダーはお前がやれ」

「本当にいいのでしょうか？」

旅の目的が変わらない以上、これはこの上ない申し出だ。エースには悪いが、魔王を倒さなくてはならない以上ここで留まっているわけにはいかない。

「構わない」

「ではよろしくお願いします。サーニヤさんも」

「はい、よろしくお願いします」

そう言ってキールに深くお辞儀した後、サーニヤと握手を交わす。すると、キールがエースから足をどけた。

「さて、じゃあ旅の準備はサーニヤに任せる」

「はい、承知しました」

「キールさんは何を？」

「これの調教だ」

「……調教？」

「そうだ。奴隷になる以上、反抗されるのはたまらんからな。徹底的に調教する」

「はあ……」

シルビアはうなずくしかできなかった。

ここまで最強と思われる力をふるってきた勇者を、いとも簡単に倒してしまえる存在に抗おうとは思わない。

弱肉強食の中生き抜いてきたシルビアにしみついている感性だ。

「ではシルビア様、少し準備のために手伝ってほしいことがあるのですが？」

「何？あと様はいいわ。もう仲間なんだし呼び捨てにして。敬語もなしね、もちろんエースに対しても」

「分かったわ。じゃあちよっと手伝ってほしいの」



「ええ。よろこんで」

シルビアとサーニャはエースを置いて、家に戻ってゆく。

「さて、調教の始まりだ」

「ひっ……」

今のエースはただ怯えるしかできなかった。

二人は僧侶と出会い、勇者は現実を知る。 2（後書き）

ちよつと勇者をイジメ過ぎたでしょうか……書いてて哀れに思えて  
しまいました。  
でもやめません！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0694y/>

---

僧侶は勇者を恫喝し、魔王を従える

2011年11月10日04時34分発行